

CONTENTS

センター長挨拶	P2
デジタルアーカイブジャパン・アワード2024受賞	P3
活動報告	P4
研究班別活動レポート	P6



双鶴図(部分)



猿図 慈雲贊(部分)

小竹書三行真跡(部分)
 天半仰容宮天
 峰標宜高抽雲霧素
 力受燈新

小竹書三行真跡(部分)



西王母図(部分)



木米急火燒図(部分)

センター長挨拶

関西大学アジア・オープン・リサーチセンター長

二階堂喜弘



関西大学アジア・オープン・リサーチセンター（KU-ORCAS）については、2022年度より体制を大きく変え、新しく研究活動に臨むことになった。それまでのユニット制から、言語交渉研究班、ユーラシア歴史文化研究班、そしてデジタルヒューマニティーズ・リサーチ班（DHR 班）の3班による研究組織へと変わった。DHR 班については、2023年9月から研究活動が開始された。この3班は、ともに東西学術研究所に属する研究班として、密接に連携して研究活動を続けていくこととなった。

もともと文部科学省の2017年度の「私立大学研究ブランディング事業」に「オープン・プラットフォームが開く関大の東アジア文化研究」が採択され、KU-ORCAS が開設されたという経緯があるが、その後、文部科学省のブランディング事業が終了したあとも、関西大学のなかで「関西大学研究ブランディング事業」として研究活動は続けられた。3研究班の体制に移行してからも、2022年度から2024年度までは着実に研究例会や研究集会を重ね、学界に寄与すること大であったと考える。

その成果を受け、これまでの KU-ORCAS の活動は、2024年の「デジタルアーカイブジャパン・アワード2024」を授けられることとなった。2024年8月には、国立国会図書館、内閣府知的財産戦略推進事務局の主催による「デジタルアーカイブフェス2024～活用最前線！～」において授賞式が行われ、KU-ORCAS センター長（二階堂）がオンラインで出席し、KU-ORCAS が取り組んできた、「研究リソースのオープン化」の結晶であるデジタルアーカイブが評価されたことに対する謝辞を述べた。このように、学外からは KU-ORCAS の研究活動について、非常に高い評価を得ることができた。

また、デジタルヒューマニティーズ関連では、人間文化研究機構の主催による DH 組織ネットワーク協議会に KU-ORCAS が参加している。日本全国の様々な DH 関連の研究機関が加入しており、今後ともデジタルヒューマニティーズの発展について、情報交換を行っていく所存である。

2025年度から KU-ORCAS の体制はまた変わっていくが、研究活動は継続して行っていく予定である。



「デジタルアーカイブジャパン・アワード2024」 を受賞しました

KU-ORCASの「関西大学デジタルアーカイブ」が「デジタルアーカイブジャパン・アワード2024」を受賞し、8月26日に授賞式が開催されました。

本アワードは、デジタルアーカイブを日常にする取組を広く社会に紹介し、その活用の機運を盛り上げることを目的として、デジタルアーカイブの拡充・利活用促進に取り組むアーカイブ機関や、つなぎ役、活用者といったステークホルダーを顕彰するもので、今年で3回目となりました。

関西大学
関西大学デジタルアーカイブ

「研究リソースのオープン化」のコンセプトの下、大学図書館ならびに研究者が所蔵する幅広い資料が収録されています。資料の画像はすべてパブリックドメインであることが明記されており、詳細なメタデータの付与やIIIFへの対応と併せて利活用の幅を広げています。

さらにはデジタルアーカイブアクセスメントツールに基づき自己評価結果の公表を行うなど、資料の公開手段としての位置づけに留まらず、信頼されるデジタルアーカイブに向けた取組が多数行われている点を高く評価しました。

関西大学 東洋学部の西田浩二先生、KU-ORCASセンター長、文学部教授



関西大学
デジタルアーカイブ



「デジタルアーカイブフェス2024～活用最前線！～」(主催：国立国会図書館、内閣府知的財産戦略推進事務局)にて執り行われた授賞式(オンライン開催)では、二階堂善弘 KU-ORCASセンター長が出席し、「KU-ORCASが取り組んできた、『研究リソースのオープン化』の結晶であるデジタルアーカイブが評価されたことに対する謝辞、及び研究成果がさらに社会還元されるよう整備していきたい」旨、スピーチを行いました。

デジタルアーカイブフェス2024
活用最前線！

2024年8月26日(月)
10:00～16:40(オンライン開催)

第1部 シンポジウム
● 日本書作家・長井都子氏 講演「デジタルアーカイブの創造性」
● 高野伸也氏 講演「デジタルアーカイブ推進に関する検討」
● 西田浩二氏 講演「デジタルアーカイブの活用」

第2部 文化観光産業とデジタルアーカイブの活用等
第3部 シンポジウム 活用事例

イベントレポート
デジタルアーカイブフェス2024
日本書作家・長井都子氏、デジタルアーカイブ活用の執筆
ロゼスを語る

2024年8月26日 06:00

「デジタルアーカイブフェス2024～活用最前線！～」(主催：国立国会図書館、内閣府知的財産戦略推進事務局)が開催され、オンラインで開催された。

会場に多くの参加者は、開催の機会として、デジタルアーカイブの活用を推進した。社会の関心、文化財の活用を促進するとともに、教育、研究、観光などの多様な分野での活用が期待されているという。こうしたことを機軸に、デジタルアーカイブの活用と利活用を推進するため、「デジタルアーカイブ」を推進し、高野の活用を推進している。

2024

- **7月6日(土)** KU-ORCAS 研究例会 (言語交渉研究班)
 - 「台湾海陸客家語教本『新客話課本』について」
遠藤 雅裕 (研究員・中央大学教授)
 - 「日本語の中国地名の変遷 ―その多様性と類型―」
田野村忠温 (研究員・大阪大学名誉教授)
 - 「東アジア諸語における漢字の造語力と理解可能性について」
沈 国威 (研究員・浙江工商大学特聘教授、関西大学名誉教授)

- **9月21日(土)** KU-ORCAS 研究例会 (DHR 班)
 - 「言語処理と情報」
「初心者から見た自然言語処理」
二階堂善弘 (主幹研究員・文学部教授)
 - 「多言語景観のデジタルアーカイブ化：情報保障の一手段として」
山崎 直樹 (関西大学外国語学部教授)

- **11月1日(金)** KU-ORCAS 研究例会 (言語交渉研究班)
 - 「『社会』『進化』と『進歩』：『時務報』を素材としての概念史的考察」
沈 国威 (研究員・浙江工商大学特聘教授、関西大学名誉教授)
 - 「布哇」の謎の解 ―この不可解な地名表記の成立過程―
田野村忠温 (研究員・大阪大学名誉教授)
 - 「台湾海陸客家語の非完了相標識“等 nen³⁵”と
事態アスペクトの関係について」
遠藤 雅裕 (研究員・中央大学教授)
 - 「域外漢語資料の文化交渉学的アプローチ
―本、人、出版社、地域等多元的視点からの再構築」
内田 慶市 (研究員・関西大学名誉教授)

- **12月14日(土)** KU-ORCAS 研究例会
 - 《2024年度 東西学術研究所 外国人招へい研究者講演会》
(ユーラシア歴史文化研究班)
 - 【講演】
「チベットアムド地域における仏教の復興運動と民間儀礼の変容について」
チヨルテン ジャブ
喬旦 加布 (中国青海民族大学准教授)
 - 《2024年度東西学術研究所 外国人招へい研究員》
「『靖康稗史』偽書説」補論
毛利 英介 (研究員・昭和女子大学准教授)
 - 「マニ教僧侶になったソグド商人?―森安孝夫教授の功績を偲んで―」
吉田 豊 (研究員・京都大学名誉教授)
 - 「オスマン朝と『魯迷』再考―嚙蜜銃の明への伝播と朶思麻―」
澤井 一彰 (研究員・文学部教授)



2025

● **2月22日(土)** 漢字文献情報処理研究会第26回大会 (共催: DHR 班研究集会)

「中国古典の形態素解析、道教リソース」(オンデマンド発表)
二階堂善弘(主幹研究員・文学部教授)

「NDL 古典籍 OCR-Lite」
師 茂樹(研究員・花園大学教授)

「漢學研究中心專題資料庫、中国国家図書館の古典籍データ」
小島 浩之(研究員・東京大学講師)



JAET ホームページ
(漢字文献情報処理研究会)

● **3月10日(月)** KU-ORCAS 研究例会 (ユーラシア歴史文化研究班)

「ベトナム・カオバン省の金石史料について」
吉川 和希(研究員・文学部准教授)

「西チベット岩石碑文にみる氏族名」
西田 愛(研究員・京都大学白眉センター特定准教授)

「アッパース朝へ赴いた唐の宦官—楊良瑤神道碑考察—」
森部 豊(主幹研究員・文学部教授)



● **3月17日(月)** KU-ORCAS 研究例会 (ユーラシア歴史文化研究班)

「『甘珠爾瓦簡略源流』考: 近代内モンゴル化身高僧のラプラン認識」
池尻 陽子(研究員・文学部教授)

「墓碑の立碑から見た15世紀朝鮮士大夫墓の朱子家礼受容(2)
~2024年度調査例を加えた考察~」
篠原 啓方(研究員・文学部教授)

「後漢三公の墓碑と列伝」
藤田 高夫(研究員・文学部教授)



● **3月17日(月)** KU-ORCAS 研究例会 (言語交渉研究班)

「言語研究とデジタル技術活用の可能性」

「日本人女性向け中国語教科書における語気助詞: 『燕語新編』と『婦女談論新集』を資料として」
石崎 博志(研究員・文学部教授)

「国名『中国』の歴史考—日本の中国史学界における通説の検証—」
田野村忠温(研究員・大阪大学名誉教授)

「戦前の中国語教材を俯瞰する」
氷野 善寛(研究員・目白大学准教授)
「近世国学者の書入れ本『万葉集』のデータ化」
乾 善彦(研究員・文学部教授)



● **3月22日(土)** KU-ORCAS 研究例会 (言語交渉研究班)

「石濱純太郎の学問とその軌跡」

【講演】

「石濱純太郎の戦後」

高田 時雄(京都大学名誉教授)

「石濱シューレの人々: 言語学会三大奇人—浅井恵倫・吉町義雄・川崎直一—」

長田 俊樹(総合地球環境学研究所 研究部名誉教授)

「東洋学者・石濱純太郎の「勉学」—大阪大学石濱文庫所蔵のノート類から—」

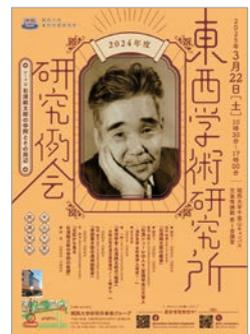
堤 一昭(研究員・大阪大学教授)

「渡部薫太郎の満洲語教育」

松岡 雄太(研究員・外国語学部教授)

「日記から見る石濱純太郎の学問の軌跡」

玄 幸子(研究員・外国語学部教授)



言語交渉研究班 レポート

奥村 佳代子
言語交渉研究班
主幹



言語交渉研究班は、大きく、言語交渉に関する研究、石濱純太郎研究、デジタル・アーカイブ構築の3分野で活動を展開した。

言語交渉に関する研究活動としては、例会で各研究員が最新の研究成果を発表し、中国語資料をはじめ、日本語資料、英語資料を用い、言語交渉という事象を多角的に捉えた。また、研究員以外の学外研究者による口頭発表も行われた。

石濱純太郎研究に関する研究活動としては、大阪大学に所蔵される石濱純太郎関連資料の整理と新たな資料の発掘を進めた。また、例会を開催し、新資料の紹介や、石濱純太郎の学問や周辺の人々に関する新たな知見が披露された。また、学外研究者による講演会も開催された。

デジタル・アーカイブの構築に関しては、本学総合図書館所蔵資料のデジタル・アーカイブ化について提案を持ち寄り、検討の結果、増田渉文庫所蔵の増田渉直筆メモ付き文献の翻刻に共同で着手した。当初、インターネット上での公開を目指したが、ひとまず雑誌論文上での紙媒体で公開することになった。

3分野ともに、資料整理と発掘、口頭発表、論文発表を経て、個別研究だけでなく、共同研究としても、それぞれ前進し成果を得ることができたとと言えるだろう。



奥村 佳代子
関西大学 外国語学部教授



2022年度から2024年度にわたる研究期間において、2つのテーマを設けた。

1つめは、域外資料に見る中国語と中国語学習状況を研究テーマの中心に据え、明治期に出版された中国語商業会話書と16、7世紀に記された西洋人宣教師による中国語学習資料を研究対象とした。いずれの資料にも、当時の中国語を忠実に反映させようとしたと考えられる側面と、学習者や学習目的を反映している可能性のある側面とを見出すことができ、本研究テーマを今後も継続するうえで、足掛かりとなる重要な成果を得ることができた。

2つめは、デジタル・アーカイブ化の着手である。本学所蔵資料のデジタル・アーカイブ化に取り組み、増田渉文庫所蔵の増田渉手書きメモの翻刻の作業を共同で行なった。増田渉の直筆文字は解読が容易ではないものも多いが、共同で作業することによって、ほとんどの文字を解読することができ



たと思う。予算の関係上、デジタル化は実現することができなかったが、翻刻を東アジア文化研究科紀要に発表することにより、当該資料の公開という目的は果たすことができた。

石崎 博志
関西大学 文学部教授



本年度は20世紀に入って日本で発行された『燕語新編』、『婦女談論新編』といった女性向け中国語教科書について、その女性話者の言葉にあらわれる言語特徴をボライトネスと語気助詞という観点で考察をした。そしてその結果を同時代の同じ体裁をとる『北京官話談論新編』と比較をすることで、当時女性が学ぶに相応しいとされた中国語の言葉が文法的にどのような特徴を有しているかを明らかにした。

その一方で、20世紀に入ってヨーロッパ人や日本人によって編纂された文語教科書についても考察を行った。20世紀に中国で白話運動が提唱されると、メディアや文学作品の多くが口語化されたが、官僚が書く公文書や条約文は依然として文語が使われていた。こうした文章語の文体の混在期において、中国語を母語としない欧人や日本人は新たな対応が求められるようになり、日本では「時文」を冠した文語教科書が陸続と編纂された。こうした背景のなかで、英国人F. Ballerは『華文釋義』という文語・口語対訳テキストを発行したが、その内容についての発表をローマで行った。その結果、欧人といっても職業や来華目的などによって文語学習の対象が異なることを指摘した。

乾 善彦

関西大学 文学部教授



● 岩崎美隆文庫の精査とデジタルアーカイブス化による、近世国学者たちの知のネットワークと知の継承の実態調査

今年度、文学部創設百周年博物館開設三十周年連携企画展「花開く大阪の文化」において、「第二章 大阪の古典学 契沖・宣長から岩崎美隆へ」の展示を行い、万葉集・枕草子春曙抄・百人一首改観抄の書入れ本、古今余材抄・源注拾遺の書写本、枕草子私記、藤門雑記（歌日記）の著述の展示、図録の解説の作成をおこなった。

● 万葉集書入れデータベースの設計

本年度は、次項の廣瀬本万葉集の情報資源化と関連して、廣瀬本万葉集と関西大学蔵万葉集寛永版の宣長注書入れ、本居宣長記念館蔵宣長手拓本の書入れとの比較翻刻し、データ化した。

● 古典籍資料の情報資源化

本テーマは、国文学研究資料館と共同で、旧KU-ORCASユニット4の研究を引き継ぎ、廣瀬本万葉集のTEI/XML化をすすめるものであるが、本年度までに、巻一・巻二のデータ化を完了し、ビューワの開発を行い、4月公開の準備を進めている。

玄 幸子

関西大学 外国語学部教授

この3年間を通じての研究活動の中で、まず第1に挙げておきたいのは2021年に開催した国際シンポジウム「内藤湖南と石濱純太郎—近代東洋学の射程」の論文集を公刊できたことである。『国際シンポジウム論文集 内藤湖南と石濱純太郎 近代東洋学の射程—内藤・石濱両文庫収蔵資料を中心に』（関西大学東西学術研究所研究叢刊65 2023年3月）がそれである。また、これらの活動を日本中国學會の「學會だより」（2023年冬号）で紹介できたことは本研究所の研究活動を広く広報できたという点で大きな意味があったと思われる。



その後、内藤湖南および石濱純太郎に関連する学術論文を5件、その他雑文を2件公刊したほか、本研究所の研究例会で2回研究発表をした。さらに、第63回泊園記念講座（2023年10月27日開催）で「石濱純太郎と敦煌学」のテーマで講演し、その記録は『泊園』第63号（2024年7月）に掲載されている。



松岡 雄太

関西大学 外国語学部教授



大阪大学附属図書館にある石濱純太郎氏の蔵書（石濱文庫）から『manjugisun tacibure hacin-i bithe（満洲語教本）』なる一冊の本（新資料）が発見されたのをきっかけに、この3年間はおつばら戦前の大阪外国語学校における満洲語教育に関する研究を行なった。大阪外国語学校では大正13（1924）年から昭和11（1936）年まで同校講師の渡部薫太郎によって満洲語教育が実施されたが、今回、上記の新資料は大正13（1924）年の授業開始当時から使われた教材であることが明らかになり、その底本にもなった、渡部による書き込みの残る満洲語資料が大阪大学附属外国語学図書館に所蔵される『満蒙漢三文合璧教科書』であることも判明した。また、渡部の教育内容は昭和4（1929）年頃を境に前半と後半に分けられることも分かってきた。以後2年間では、引き続き後半の時期に使用された満洲語教材の分析を進めてゆき、大阪外国語学校で行なわれた満洲語教育の全容を明らかにしてゆく所存である。

内田 慶市

関西大学 名誉教授



この3年間の活動は個人的にはかなり充実したものとなったように思っている。論文3本、国際会議等での基調講演、研究発表27本その他、学術講演も20回ほど、インタビュー記事も10本を数えた。特に、言語接触研究のみならず、「文化交渉学」に関しての内容の講演を方々で行い、その認知度を高めることに努めた。論文発表は以下の通りである。

- ・「江沙維《汉字文法》的语言特点及相关问题」，《国际汉语教育史研究》第5辑，25-37頁，商務印書，2022.11.
- ・「新しく発見された『燕京婦語』の写本について」，《周縁資料と言語接触研究》（関西大学・東西学術研究所研究叢書，第12号，言語交渉研究班）1-29頁，2023.3.
- ・再論「您」の相關問題-基於域外漢語文獻，《國際漢語史研究》第一輯，116-127頁 2023.2

遠藤 雅裕

中央大学 法学部教授



● 研究発表

以下の通りKU-ORCAS研究例会にて研究発表をおこなった。

(1)「台湾海陸客家語教本『新客話課本』について」

2024年 7月 6日

本発表は、台湾新竹で刊行された『新客話課本』（1962年、天主教華語学院）が反映する客家語が、音韻体系及び内容面から台湾海陸客家語であることを立証したものである。

(2)「台湾海陸客家語の非完了相標識“nen³⁵等”と

事態アスペクトの関係について」2024年11月1日

本発表は、海陸客家語の非完了相標識“nen³⁵等”が“大”等の状態型動詞や“到”等の到達型動詞と共起し、状態型動詞については漸進的変化、到達型動詞については事態が実現する前段階の漸進的変化をあらわす可能性があること、このような機能は標準中国語の非完了相標識“著”には存在しないことを議論したものである。

●論文

博士学位請求論文として以下の論文を執筆し、2024年9月東京外国語大学に提出した。

「台湾海陸客家語のアスペクト体系研究」(遠藤雅裕、総ページ数332頁)

本論は台湾海陸客家語のアスペクト標識を記述・分析し、陳前瑞(2008)の四階層アスペクト体系を作業仮説として体系化することを試みたものである。

小川 仁

京都精華大学

国際文化学部特別任用講師



バチカン図書館の日本関係図書目録に記載された資料を具に調査していくなか

で、「高橋松願関連資料」の内実を詳らかにするに至った。高橋松願(しょうこ)は、昭和戦前期から戦後にかけて新潟を中心に活動していた書家で、自らが収集した古写経を、バチカン図書館に献呈した人物である。「高橋松願関連資料」は、高橋松願が教皇ピウス11世に宛てた古写経贈呈添状一通、平安期写経大般若波羅密多經第百八十三巻一通他、中世期日本の写経断簡通等を含む計11点の史料で構成されている。

当該研究では、高橋松願がバチカン図書館に古写経を献呈するに至った経緯に着目し、従来の研究では殆ど顧みられてこなかった「昭和戦前期における日本の一地方都市とバチカンを巡る文化交流の諸相解明」を目指すものである。コロナ禍の影響もあり現地調査の進捗は芳しくはなかったが、2023年2月には、高橋が献呈した古写経を国際仏教大学院大学の落合俊典教授に現地でも鑑定して頂き、翌3月にその成果報告会を関西大学アジア・オープンリサーチセンターで開催、落合教授の分析により、上述の大般若波羅密多經第百八十三巻の写経が本物であることが明らかとなった。



塩山 正純

愛知大学

国際コミュニケーション学部教授



この一年間は、報告者の所属機関の前身の一つである東亜同文書院大学が一年次生向けの中国語テキストとして使用していた『華語萃編』初集を分析対象として、戦前日本の中国語教育で扱われた官話の特徴について考察した成果を、論文「書院生が『華語萃編』初集で学んだ中国語」(『関西大学中国文学会紀要』45号(2024年))として公表した。また、近代西洋人による官話研究に関するものでは、『天路歷程』を資料として考察した成果を、論文「『天路歷程』官話版にみる十九世紀後半から二十世紀初頭の官話の一端」(『文明21』52号(2024年))として公表した。この間、京都ノートルダム女子大学の朱鳳氏と共同で明治初期における唐通事の家系出身の何礼之によるウェーランドの経済学教科書の翻訳である『世渡の杖』のくずし字本文の翻字作業に取り組み、来年度の出版に向けて作業を継続している。

沈 国威

関西大学 名誉教授



2018-2021年基盤研究C「漢字文化圏における近代二字漢語動詞と形容動詞の発達と交流に関する総合的研究」に続き、2022年から「日中における言文一致の語彙的基盤に関する研究」というテーマで学術研究助成金(基盤研究C)を獲得し、東西学術研究所言語交渉研究班の研究活動にタイアップして研究を進めてきた。研究所の素晴らしい研究環境と仲間恵まれ、『語彙力の獲得』(2023年3月関西大学出版部)「中国語の近代性と『英華大辞典』(1908)」(2022年3月『東西学術研究所成立70周年記念論文集』)、「近代翻訳史における嚴復の「信達雅」」(2022年7月『東西学術研究所紀要』第55輯)、「東アジア共通国際語の研究:序説」(2024年3月『外国語学部紀要』第30号)といった形で成果を報告することができた。2024年3月末をもって定年退職したが、しばらくの間東西学術研究所の研究員として研究活動に精進する決心である。

田野村 忠温

大阪大学 名誉教授



この3年間に実施し、結果を論文の形で発表した研究はいくつかの分野にわたる。①語史の方面では、日本語の中国地名の多様性と歴史、国名「中国」の歴史、ハワイを表す日本の漢字表記「布哇」の成立過程、学問名「考古学」の語史、現在貨物自動車を表すのに使われる中国語の名詞「卡车」の語史を考察した。②日本の初期英語学習史に関しては、中浜万次郎訳『英米対話捷徑』、著者不明の『和英商賈対話集』などの幕末英語学習書4点の依拠資料と編集の問題を考察し、従来の通説の誤りを明らかにした。③学術概念の考察としては、論者ごとに様々に使われてきた音訳と意訳の概念を再考して体系化するとともに、江戸時代の用語法

に関する従来の通説の誤りを正した。④文献学的考察としては、19世紀中国の重要な世界地理文献である謝清高『海録』と魏源『海国図志』に関する従来の版理解が非常に不正確であったのを抜本的に再考した。

また、過去約10年間の研究成果を著書の形にまとめ、『近代日中新語の諸相』『英語東漸とその周辺』（ともに和泉書院、2023年）として刊行した。

口頭発表としては、言語交渉研究班研究会（7回）のほか、東アジア文化交渉学会国際学術大会（2回）、復旦大学での会議（2回）、鄭州大学での会議（1回）などで発表を行った。

千葉 謙悟

中央大学 経済学部教授



2024年度は英国人啓蒙家 John Fryer 等による *Syllabary for the transfer of foreign names into Chinese* について、その概要を“A preliminary remark on *Syllabary for the transfer of foreign names into Chinese*”と題して International workshop on East Asian materials stored in Italy（ローマ大学、2024年9月11日）にて発表した。これはフライヤーたちが定めた欧語音節と中国語音訳漢字との対応表であり、近代において音訳語を統一的に生成するための早期の試みといえる。本発表ではこの文献の書誌的な紹介をするとともに、音訳漢字の基礎方言が当時の官話音に基づいていることを指摘した。

堤 一昭

大阪大学 人文学研究科教授



大阪大学総合図書館の「石濱文庫」資料、特に石濱純太郎自筆のノート類の調査を通して、石濱と彼をとりまく東洋学のありさまを探ってきた。東京帝国大学時代の受講ノート、関西大学ほかでの講義・講演ノートの概要を関西大学の『国際シンポジウム論文集 内藤湖南と石濱純太郎 近代東洋学の射程 - 内藤・石濱両文庫収蔵資料を中心に -』で発表したほか、大阪大学博物館での「石濱純太郎展」（2023年度）の第Ⅱ部 石濱純太郎をめぐる人々——学芸のネットワークでも、ノート類の展示により彼の勉学の“姿”を示した。2024年度は未調査のものを含め、書架に散在していた自筆ノート類約250冊全体をまとめ、内容確認と目録化を行った。ノート類は市岡中学時代から関西大学教授時代にまで及び、またその中の読書札記「好治問事室日札」は、彼の研究期間の大部分（1918/大正7~1954/昭和29）を覆う。これらから知り得る彼の勉学の軌跡は、日本の東洋学がモンゴル語、満洲語、チベット語など多言語資料へと研究対象を拡げていった過程を知る好事例であり、これも一種の「東西言語文化接触」といえるのではなかろうか。

永井 崇弘

福井大学学術研究院
教育・人文社会系部門教授



2024年度の活動として、口頭発表1件（東アジア文化交渉学会第16回大会、題目：「麦都思与施敦力南京官话新约圣经1856年版与1857年版译文之异同」）、年度内刊行予定の論文2編（①永井崇弘2025.《麦都思与施敦力南京官话新约圣经译文的形成 - 有关1856年及1857年版本异同之考察 -》、《関西大学中国文学会紀要第46号》：1-12頁、②永井崇弘2025.《基督教东渐与日本汉译圣经流传之情况》、《福井大学教育・人文社会系部門紀要第9号》：掲載ページ未定）、さらに学会展望1件（永井崇弘2024.「学会展望（四、文法・語彙（近代）」、『中国語学』271：143-145頁）が挙げられる。論文①では南京官話訳新約聖書の1856年版と1857年版の訳文を比較し、その異同箇所の特定制とその分析を行った。これにより、異同箇所がヨハネと使徒に集中していること、異同が口語と文語の調整にあることが判明し、南京官話訳の訳文成立過程の一端が解明された。また論文②では日本現存の漢訳聖書の所蔵特徴を考察した。この論文により、幕末頃から明治のキリスト教解禁後に出版されたものが多いこと、漢訳聖書の約98.7%がプロテスタントによるもので、カトリックと正教によるものは各約0.6%と極めて少ないことが判明した。



氷野 善寛

目白大学 外国語学部准教授



明治から昭和初期にかけての中国語教材や雑誌の収集と目録の再整理、デジタル化を中心に作業を進めている。特に、当時の学習者の学習記録が分かる書き込みのある教材やノート類の収集と目録整理に力を入れており、『上海語自習簿』や『昭和13年2月支那語講座』、『支那語てほどき（支那語速成教程）』、『官話急就篇』を使用した学習ノートである『支那語研究帖』（大正6年）などを発見、収集した。また、雑誌についても中国語学習と一見関係が薄いように見えるものに掲載された中国語学習関連記事の収集を行い、『婦人公論』（昭和16年12月号から17年3月号）や『話 臨時増刊 これが戦争だ!』（昭和12年6月13日）、『旅』（第17巻第2号 昭和15年1月刊行）に掲載されている記事を確認した。さらに、『官話指南』など一部の教材を試験的にTEIを用いてマークアップする作業を開始し、AIやテキストマイニングを用いた教材の解析やテキストの視覚化を行うための準備も進めている。

ユーラシア 歴史文化研究班 レポート

森部 豊

ユーラシア歴史文化研究班
主幹



本研究班は、「文書・出土・石刻史料が語るユーラシアの歴史と文化」というテーマを掲げ、朝鮮半島から中国、内陸アジアを経て、アナトリア半島にいたるユーラシアのほぼ全域に分布する石碑、出土した簡牘・紙片文書、あるいは未整理の手書き文書などを利用し、ユーラシア各地の多様な歴史像を浮かび上がらせ、あるいは従前の歴史像をいかに書き換えることができるのかを探っていった。研究員各人の成果は、それぞれの項目を参照していただきたい。本研究班全体の活動としては、年に3回の研究例会を開催して学内外に広く研究成果を発表した。また新しい試みとして、研究員共同の野外調査を実施したことを挙げる事ができる。2022年度は高知大学図書館が所蔵する青木富太郎文庫および土佐藩山内家墓所の調査を行った。2023年度はベトナムのハノイへ赴き、唐代の梵鐘、ベトナム王朝時代の碑文、漢喃研究院での拓本調査を行った。2024年度は台湾の台南へ赴き、寺廟の石碑調査を行った。

森部 豊

関西大学 文学部教授



今期の研究活動は、科研費基盤研究(C)「石刻史料を用いた唐朝の羈縻支配像の再検討」(JSPS20K01010)および同「石刻史料を用いた唐代の蕃将・蕃兵に関する基礎的研究」(JSPS24K04274)を獲得し、二つのテーマについて研究を行った。一つは、唐朝が周辺のエスニック集団に対して行っていた統治方法、いわゆる「羈縻支配」を研究対象とした。従来のイメージが、エスニック集団の首領に唐朝の官職を授け、その下の部族集団を唐朝が間接的に統治するというものであったのに対し、必ずしもそのような一元的支配システムではなく、唐朝が漢人官僚を派遣したり、あるエスニック集団の人員を他の集団の統治機構に送りこんだりする事例が確認する場合もみられることを明らかにした。

またベトナム・ハノイで出土した唐代の梵鐘の調査を行った。この梵鐘には、製作や奉納に関わった当時のベトナム北部在住と思われる人びとの名が鑄込まれている。この調査を通じ、正確な釈文を作成し、今後の唐朝の羈縻支配、蕃将・蕃兵研究の手がかりを得た。



池尻 陽子

関西大学 文学部教授



今期のユーラシア歴史文化研究班では、非典籍文書史料を活用した研究活動を実施した。私自身のこれまでの研究範囲を超える挑戦ができた有意義な3年間であった。その中で、2022年度第1回研究例会(2022年7月30日)において実施した「摂政テモ=ホトクト晩年におけるサムイェー僧院修繕と扁額賜与の請願について」と題する報告において、ラブラン(bla brang)という化身高僧の私邸が私産管理と転生相続を担う単位として重要な意味を持つことを再確認したこと。ここから発展させた研究成果を、2023年8月に実施された第7届北京国際藏学検討会(BISTS)において“A Study on the Introduction of the Title of Jasak-Lama to the Tengyeling Monastery in the 18th Century”として報告した。化身高僧とラブランは、チベット史に限らず清朝史やモンゴル史にとっても大きな論点となりうる。また、前近代のみならず、近現代における展開も注目される。これに関して、2024年度研究例会(2025年3月実施)において、近代内モンゴルおよび台湾における化身高僧の活動とラブラン認識に関する研究報告を行った。

澤井 一彰

関西大学 文学部教授



「オスマン朝と「魯迷」再考—嚙蜜銃の明への伝播と朶思麻—」

本報告では、ユーラシア大陸における東西交流史の重要資料として、半世紀以上も前から知られた『神器譜』の記述内容にかかわる歴史的評価について、従来は等閑視されてきたオスマン朝史料を主に用いて再検討を試みた。『神器譜』は、豊臣秀吉による朝鮮出兵と向き合った明軍の苦戦を背景に、倭銃すなわち日本銃に対抗するべく、より優秀であると考えられたオスマン朝の銃（嚙蜜銃）の操作教本ともいべき著作である。そこでは、嚙蜜銃は嘉靖年間に嚙蜜から来訪した「朶思麻」なる人物がもたらしたとされ、先行研究ではこれをもってオスマン朝と明の間には公式的な外交関係が存在したと解釈されてきた。しかし『明実録』の記事や、オスマン朝の一次史料と突き合わせて考えると、朶思麻は、制限された朝貢の規模を拡大しようとした近隣のウイグルスタン・ハン国によって、オスマン朝の名を語って送られた偽使であった可能性が極めて高い。一方、銃そのものについてはオスマン朝製であった可能性が残される。ただし、これもオスマン朝が中央アジアのシャイバーン朝に対して行った軍事支援の結果、その一丁がウイグルスタン・ハン国経由で北京に流れた蓋然性が高いと考えられる。

篠原 啓方

関西大学 文学部教授



研究班における個別テーマは「朝鮮古代・近世の碑と碑文の研究」であった。まず古代については、戦後の朝鮮古代史研究者の第一世代にあたる井上秀雄（1924-2008）の拓本資料の紹介を兼ねた報告を行った。拓本は韓国成立後の新出資料や北朝鮮での調査資料などを含む貴重なコレクションであるが、さらに報告後、蔵書整理の過程で追加の拓本が見つかり、これらの整理が今後の課題である。近世については、同時に進行していた科学研究費補助金基盤研究〔課題番号20K00086〕（14-15世紀における朝鮮の儒葬受容に関する総合的研究）と合わせ、韓国で4回、士大夫の墓碑・神道碑およそ80基の調査を行い、『朱子家礼』に定める墓碑との共通点・相違点などから儒葬受容のあり方を考察した。また比較資料として、高知において土佐藩山内家墓地の亀趺碑、ベトナム・ハノイにおいて唐代梵鐘、李朝・陳朝・黎朝の石碑、台湾において寺廟の石碑の調査を行った。

藤田 高夫

関西大学 文学部教授



後漢時代に隆盛をきわめた石刻は、後の時代の石刻の規範を準備した点で重要である。現在では原碑の失われたものも多いが、なんらかの著録のあるものは300を超えており、その有効活用は長年の課題であった。とくに漢代の墓碑類においては、経書を主とする典拠をふまえた文章が多くを占め、そこにさまざまな異体字、仮借字が多用されるために、碑文

の正しい読解に一定の困難が存在している。そのため、宋から清までの金石学においては読解のために多くの著作が積み重ねられてきたが、その全体に通読することは極めて難しい状況となってきた。本研究では、漢・六朝の碑文を当面の対象として、テキスト化された碑文を素材として、テキストアナリティクスの手法を用い、語句と典拠とを紐付けた語彙集成を構築して、碑文読解のための汎用的な辞典作成を目的とする基礎作業を行った。辞典は構築途上であるが、この試みは、すでに万を超えるオーダーに達している唐代墓誌銘の読解にも強力なツールを提供するものとなりうる。

吉川 和希

関西大学 文学部准教授



2022~2024年度は、ベトナムにおける金石史料や文書史料の収集・分析を通じて、①18~19世紀の北部ベトナムにおける村落住民の動向の考察、②19世紀のベトナム東北地域における社会変容の考察、をおこなった。①については、仏寺や神祠などを維持管理する代わりに各種税役が減免される皂隸に焦点を当て、黎朝（1428~1527/1533~1789）→西山朝（1788~1802）→阮朝（1802~1945）と王朝交替が起こった際に皂隸の村落が中央政府や地方官に対して公的負担の減免を働きかけていたことを明らかにした。また2022年度および2023年度には土王祠や毘山寺など18~19世紀の皂隸関連の金石史料が現存する史跡において実地調査をおこなった。②については2024年8月にベトナム東北地域に位置するカオバン省で史料調査をおこない、2015~2016年にカオバン省博物館がカオバン省各地で収集した金石史料の拓本の調査をおこなった。

西田 愛

京都大学 白眉センター特定准教授



非典籍文字史料を対象とする本研究班において、報告者は「西チベットにおける古チベット語石刻資料の研究」という題目のもと、3年間の研究を実施した。研究初年度には、「西チベット岩石碑文研究の現在」として、中華人民共和国・西藏自治区のンガリ（阿里）から北西インドのラダックを通り、パキスタンが実効支配をするバルティスタン、アフガニスタンのワハーン渓谷にかけての地域に散在する、チベット文の記された巨石や岩石に関する研究状況を概観し、本研究班で取り組む課題について発表した。二年度目には、バルティスタンおよびラダックで実施した磨崖仏とチベット語磨崖碑文の調査報告を中心に発表を行なった（「西チベット碑文調査報告」）。録文の比較研究により、二地点の碑文内容と刻文の作法に共通性が見られることがわかった。研究最終年度には、初年度に掲げた課題の研究結果として、「西チベット岩石碑文に



西チベット（インド・ラダック）での岩石碑文調査の様子

みる氏族名」について発表した。現在までに現地調査を通して確認した岩石碑文中の氏族名を所在地ごとにまとめて分布を示し、これらの氏族の出自に関する現状報告を行なった。

毛利 英介

昭和女子大学 人間文化学部准教授



コロナ禍以降在外研究活動を行っておらず、この三年間の研究活動は全て国内でのものとなった。この間研究班では年1回づつ研究発表を行った。『靖康稗史』偽書説一本文の検討を踏まえて・「中国遼寧省北鎮市出土遼代墓誌銘群に関する初歩的研究」・「『靖康稗史』偽書説」補論」である。このように、『靖康稗史』という文書類を収録した典籍と、遼代の石刻資料の二本立ての研究となった。『靖康稗史』については、文章として「『靖康稗史』の「出現」について―『謝家福書信集』所収史料の紹介―」（『文書・出土・石刻史料が語るユーラシアの歴史と文化』2023、関西大学東西学術研究所）及び「『靖康稗史』存疑」（『東洋史研究』23-1、2024）を公表している。また遼代の石刻資料を用い、「契丹文資料における渤海国・東丹国の用例の紹介-遼代の渤海認識の検討のために―」と題した発表をシンポジウム「高句麗・渤海史の射程II」（2023年3月4日金沢市）で行った。その他文献調査として、2024年8月から9月に、東洋文庫にて明刊本甲種本『華夷訳語』、宮内庁書陵部にて清鈔本『大金集礼』、静嘉堂文庫にて清鈔本『翰苑群書』の調査を行った。

吉田 豊

京都大学 名誉教授

期間中は金石文を用いたソグドおよびソグド人の歴史の研究を行った。金石文としてキルギス共和国北部チュウ川流域で出土したソグド語銘文を備えた中国式の鑄造方孔銭（8~10世紀）、モンゴル高原で発見されたセヴレイ碑文（8世紀後半）、西安で出土したソグド商人米副候墓誌（漢文；9世紀前半）を取り上げた。安史の乱（755~763）以降、ソグド商人の活動は徐々に衰退していくが、取り上げた3種類の金石文は、どれも8世紀後半以降のソグド人の活動、とりわけチュルク族の中に入り込んで活動を続けるソグド人の記録としてきわめて貴重である。



写真はチュウ川流域で出土するコインで、反時計回りに読むソグド語の銘文は「神なるカルルク可汗の銅銭」とある。8世紀後半、この地域をチュルク系のカルルク族が支配し、ソグド人がそのコインを発行していた証拠である。

Topics 1

ユーラシア歴史文化研究班の主幹 森部 豊教授が「新書大賞2024」に入賞

文学部 森部豊教授の著書『唐—東ユーラシアの大帝国』が、中央公論新社主催の第17回「新書大賞2024」で13位に入賞した。同賞は、2022年12月~2023年11月に刊行された1200点以上の作品から有識者、書店員、各社新書編集部、新聞記者など、新書に造詣の深い107人の投票によって選ばれた。



https://www.kansai-u.ac.jp/headlines/entry/post_77271.php ▲



『唐—東ユーラシアの大帝国』 森部 豊 著 中公新書

DHR 研究班 レポート

二階堂 善弘 DHR研究班 主幹



デジタル・ヒューマニティーズ・リサーチ班（DHR 班）は、2023年9月から活動を開始した。2024年1月24日には、関西大学児島惟謙館にて、「東アジア研究データベースの現状と展開」とのテーマで、第1回の研究集会を開催した。発表者は、二階堂善弘主幹と二ノ宮聡研究員。東方書店の提供により、トライアル試用を行った大規模データベースと、その活用について研究員全員で討議を行った。

2024年3月2日には、児島惟謙館にて第2回研究集会を開催した。この会合は、漢字文献情報処理研究会との共催になるもので、テーマは「AIの人文学への活用」であった。発表者は、国立国語研究所助教の宮川創氏と師茂樹研究員であった。会合ではAIをめぐって活発な討議が行われた。

2024年5月11日には福井のあわら温泉において、東アジア文化交渉学会が開催された。この国際会議において、デジタルヒューマニティーズの部会にDHR 班の研究員が多数参加することになった。

2024年9月21日には、児島惟謙館において第3回研究集会が開催された。テーマは、「言語処理と情報」であった。発表者は、二階堂善弘主幹と関西大学外国語学部教授の山崎直樹であった。オンラインも含め、さかんに討議が行われた。

二階堂 善弘 関西大学 文学部教授



デジタルヒューマニティーズ・リサーチ班（DHR 班）の主幹として、研究集会で発表するとともに、KU-ORCASの活動を内外に伝えるための活動も行ってきた。

2023年11月18日には、東京ビックサイトにおいて、デジタルヒューマニティーズの国際シンポジウムが開催された。テーマは、「デジタルヒューマニティーズと研究基盤 - 欧州と日本の最新トレンド」であった。数多くのデジタルヒューマニティーズに関連する団体がポスターセッションを含む発表を行った。そこで、「関西大学 KU-ORCAS の活動について」と題して紹介を行った。参加者は多数であり、大盛況であった。個人的には、国際シンポジウムという場にもかかわらず、英文をほとんど使用せずにポスターを掲げるなど、問題も多かった。

2024年12月22日には、東京大学において同様にポスターセッションの機会をあたえられた。伊藤国際学術ホールにおいて、「仏教研究とデジタルヒューマニティーズ国際シンポジウム」が開催された。そこで「関西大学アジア・オープンリサーチセンターの活動紹介と道教経典の電子化」とのタイトルでポスターセッションを行った。前回の失敗をふまえ、ポスターとスライドには英文を多く配した。また資料配付も行った。多くの研究者に興味を持ってもらえたものと思う。

小島 浩之 東京大学 大学院経済研究科講師



論著としては、単著論文の「唐・五代官人の行政実務と法令：官府別の法令集と「法令壁記」をめぐって」（氣賀澤保規編『論集隋唐仏教社会とその周辺』汲古書院、2023.9）、および共編訳の『訳註「名公書判清明集」懲悪門』（汲古書院、2024.3）を公にした。また研究発表では、2024年11月に台湾大学で開催された「中国法制与性別・社会的交融：台日学者聯合学術研討会」において上記単著論文に基づく発表を行い、同年12月に富山大学で開催された「学術シンポジウム『宋代官僚制と行政文書：中国専制国家の構造的性質』」では、「中国前近代の文書様式と文書行政：通時的・構造的な理解のための一試論」と題して研究報告を行った。いずれの成果においても、史料批判のための有効なツールとして、各種デジタルアーカイブやデータベースを利活用している。

佐藤 仁史 一橋大学 大学院社会学研究科教授

近年は長江下流域の「水域社会」における開発と秩序形成史について集中的に分析を進めている。KU-ORCASのデジタルヒューマニティーズ・リサーチ班においても、水域社会史研究とデジタル・ヒューマニティーズとの接合を図るべく、史料蒐集や初歩的な分析を行った。具体的な成果の1つとし

て、2024年度東アジア交渉学会大会（於：福井あわら温泉清風荘、2024年5月11日）において行った「水域社会史研究におけるデジタル・ヒューマニティズの試み——『海曲詞鈔』の分析に向けて」という報告がある。『海曲詞鈔』という詩集に収録されている江蘇省南匯県における著名な詩人813人の詩作4246首を、HGISの手法を用いた処理を行うことによって、地域の開発や有力家族の社会上昇について長期的時間軸からの分析を試みるための手法について述べた。今後は、データの整理を進め、具体的な分析とその成果報告を2027年3月までに進める予定である。また、この3年間において、日本語論文以外に、中国や香港の中文雑誌やフランスの英文雑誌においても関連成果を発表した。

田邊 鉄

北海道大学情報基盤センター
デジタルコンテンツ研究部門 准教授



デジタル人文学（DHR）において、後継人材をどのように養成するか、を主たる課題として、言語と情報の統合学習手法や、その評価、情報セキュリティ上の懸念などについて検討した。研究期間が、ChatGPTなど生成AIの利用が急拡大した時期にあたり、学習・教育・研究においてAIとどう向き合うかについての検討が大きなウェイトを占めることとなった。

2023年度には、特に配慮の必要な児童生徒を対象とした情報モラル教育について小中学校教員対象の研究集会を実施、発達段階によるAI利用の制限をすべきか、課外学習でAIを自由に使えるべきかといった検討を行った。

2024年度は、生成AIを用いたマルチモーダルな体験を通して、言語モードのコミュニケーションの相対性を理解したり、AIをコミュニケーションの主体と「みなす」方法を体験的に身につけるような授業カリキュラムの開発を企図し、外国語教育関係者を対象にワークショップを行った。これらの成果は、2023・24年度教育工学会、2024年度東西交渉学会で発表した。

永崎 研宣

慶應義塾大学 文学部教授
一般財団法人人文情報学研究所 主席研究員



この3年間の主な研究活動としては、(1) TEI (Text Encoding Initiative) ガイドラインの東アジアテキスト資料への適用に関する研究開発と普及活動、(2) IIF (International Image Interoperability Framework) 普及と利活用に関する研究と開発、(3) AI支援型古典書籍OCRを用いた漢語仏典の協働編集システムの開発、(4) 生成AIを用いた研究支援用RAGの開発等、主に人文学の研究活動を支援するための研究開発に取り組んできた。(1)に関しては、2022年には入門的な概説書『人文学のためのテキストデータ構築入門』（文学通信）を共編著として刊行し、これがデジタルアーカイブ学会学術賞（著書）を受賞した。

2024年には、東アジアテキスト資料向けのビューワを開発・公開して広く利用者に供しつつ国内外各地で発表を行い、デジタルアーカイブ学会学術賞（開発）を受賞した。同年、文部科学省「人文学・社会科学のDX化に向けた研究開発推進事業」の一部としてTEIガイドラインに基づく東アジアテキスト資料のデータモデル構築と普及に関する事業を慶應義塾大学が受託したため、この活動を拡充しつつ取り組むことになった。(2)に関しては、2024年に総合的な概説書をオープンアクセス出版として刊行した。(3)主に海外で注目され各地のシンポジウムに招待され講演を行った。

二ノ宮 聡

北陸大学
国際コミュニケーション学部 講師



本年度の研究活動の成果は、まず5月に福井県あわら市で開催された東アジア文化交渉学会が挙げられる。DHR班が組織されてから最初の大きなイベントであった。学会ではDHR班で「デジタル・ヒューマニティと東アジア文化交渉の研究」のパネルを組み、3名の研究員が発表した。筆者はコメンテーターとして参加した。それまでは研究例会で個別の研究報告があったが、本学会でDHR班としてまとまった発表があったのは、一つの成果であろう。

また、個人研究では、国際学会2回、研究会1回の発表をした。研究会の発表は、科研費のテーマである上海の春節廟会についてである。筆者は上海には不案内であったが、夏と冬の計4回の調査を通じて、上海の宗教施設、特に道教関連の寺廟や春節での宗教活動の状況が分かってきた。この成果は2024年度末に調査報告書を発表した。

師 茂樹

花園大学 文学部教授



筆者はこれまで、コンピュータの普及によって過去表象や歴史認識がいかに変化するかを検討してきた（「データベースがもたらすもの：コンピュータの中の歴史／物語」『日本史の脱領域：多様性へのアプローチ』森話社、「上書きされる蒙古襲来のイメージ：パブリック・ヒストリーとしての『Ghost of Tsushima』」『歴史評論』870など）。近年、監視資本主義が進展し、最近では亡くなった人物を再現するアプリケーションなども開発されている。これらも過去表象の一種であり、歴史学の方法論につながる問題だと思われる。筆者はここ数年、この問題について検討、口頭発表してきたが（下記）、今後も継続して検討していきたい。

- 「Nico Nolden and Eugen Pfister. "Gaming and Digital Public History"」第6回関西デジタルヒストリー研究会、2022年7月24日
- 「「史実」と「創作」の間で：歴史実践としてのポップカルチャー」パブリックヒストリー研究会第15回公開研究会、2023年8月26日

- 「AIを用いた「再現」の問題点」漢字文献情報処理研究会第25回大会／関西大学アジア・オープン・リサーチセンターDHR班第2回研究集会、2024年3月2日
- 「AIによる死者の「再現」と、歴史叙述・フィクションとの境界」日本宗教学会第83回学術大会、2024年9月14日

- 「死者への冒瀆なのか、新たな宗教体験なのか：AIによる死者／聖人の再現をめぐって」東洋哲学研究所2024年連続公開講演会「AIと信仰・宗教・思想」第4回講演会、2024年12月21日

Topics 2

人間文化研究機構「デジタル・ヒューマニティーズ・コンソーシアム」へ参画

我が国の人文諸分野の研究DXの推進に向けた動向把握や他機関とのネットワークキングを図るため、大学共同利用機関法人 人間文化研究機構が立ち上げた「デジタル・ヒューマニティーズ・コンソーシアム」に参画した。

同機構は文部科学省「人文学・社会科学のDX化に向けた研究開発推進事業（データ基盤の開発に向けたデジタル・ヒューマニティーズ・コンソーシアムの運営）」に採択されているもので、2025年2月28日のDHコンソーシアム第1回全体集会、3月1日のキックオフシンポジウムに二階堂センター長が出席した。今後は、DHR班が中心となって「研究・基盤規格構築部会」に参加しつつ、国内機関の協働体制を構築面で連携していく。



<https://www.nihu.jp/ja> 人間文化研究機構ホームページ ▲

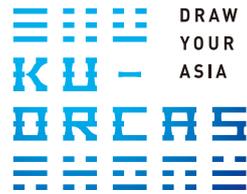
Topics 3

「京都御苑アーカイブ」との連携を開始

「関西大学デジタルアーカイブ」は、京都御苑（環境省）が2025年4月に開設する「京都御苑アーカイブ」と連携（横断検索）を開始する。「京都御苑アーカイブ」は京都御苑に関わる歴史や自然等の記録を整理し、環境省の資料や各機関の公開する資料を横断的に検索できるデータベース。今回の連携により、京都御苑に関連する本学デジタルアーカイブ上に公開している資料へリンクされ、本学デジタルアーカイブへのアクセスの向上が期待される。



<https://kyotogyoen.go.jp> 京都御苑ホームページ ▲



DRAW
YOUR
ASIA

関西大学
アジア・オープン・
リサーチセンター

四時花鳥図巻



No8

KU-ORCAS NEWS LETTER

発行日 2025年3月31日
発行 関西大学アジア・オープン・リサーチセンター
〒564-8680 大阪府吹田市山手町3丁目3番35号
TEL:06-6368-0653 E-Mail:ku-orcas@ml.kandai.jp

